

農業・農村の 変革を目指す女性像



いま、農業は国際化時代を迎え、新しい農業・農村の方向が模索されている。

反面、農村では高齢化が進む一方、若者が次第に減少するという現象となっている。そのためにも農業・農村の活性化が急務の課題となっている。

この農業・農村を変革するため、婦人が果すべき役割は極めて重要な意味をもっている。

本号では各界・各層から婦人の主張を特集した。

(編集部)

いま、農村婦人は何をなすべきか

作家 向井承子

一九六一年、北海道大学法学部卒業。

北海道庁勤務後、フリーに。現在、作家。

著書に「大地の女たち」「小児病棟の子どもたち」他。

共著に「変貌する農村と婦人」「むらを動かす女性たち」他。

農業は天地自然と人の和で

農村は心安らぐ宇宙

農村女性の生きる姿に心ひかれて、現場をお訪ねする機会が少なくな。

いったい、どんな点に心ひかれるのか、と問われても、その道の学者や研究者ではない私には理論的にうまく整理整頓して伝える術はない。だが、印象めいた表現をいくつかならば、記すことはできるような気がする。

もっとも心ひかれる理由のひとつは、そこが長い時間私たちの精神が依ってきた魂のようなものを未だに備えた、心安らぐ宇宙と感

じさせてくれる点にある。その反対に、都会とは、商品として生き残ることのみが許されるモノたちの溜まり場である。街を歩けば、それぞれの生存を賭けて大量に市場に送り出され、売れ残れば廃棄されるしかない宿命の商品が、決死の厚化粧で消費者を襲ってくる。なにもかもが、貨幣を生

む経済のシステムから切り離しては存在しえない宿命で、道路はひっきりなしに掘り返され、景色は時々刻々に変化する慌ただしさである。なじみの店や人が、一夜にしてかき消える。春夏秋冬、一刻の休みもなく新しいトレンドイ商品が開発陳列され、古いものはいすこへともなく押しやられる。もちろん、農村も軽薄な使い捨て文化の流れを支えるマーケティングとして期待され、十分にその役割を果たしてきたことも分かつている。だが、旅人の心に触れるものは、なぜか、どこか違う。その違いをここに記してみたいと思う。

いうまでもないが、農業とは天地自然の理に従順でなければならぬ産業である。嵐のような高度経済成長期を経て、工業化社会にすっかり変貌してしまったこの国では、自然が存分に人間を支配する光景など、時として都市機能を麻痺させるほどの大水害や台風以外にはほとんど体験することがな

くなってしまった。が、農業は四季のめぐりや気象の少しの変化にも大きな影響を受ける。近代文明国家の擁する産業でありながら、天候不順や干ばつ、冷害などに打つ手なしといった宿命は、まだその営みの大部分が天地自然の摂理に支配されている、自然とのつきあいをもつとも大事にする産業と

農業は孤独では

成り立たない

しかも、古来、農業は孤独な作業では成り立たない性格である。家族や共同体を営みあう人間たちが、天地自然の理を軸に、人間のささやかな力を寄せ合う。そういう宿命が養ってきた香りが、いまもふんふんと漂って感じられるのである。機械に代替しえない、システム化できない要素が多すぎる。工業化社会の流儀には、そもそもなじまないその宿命こそが、都市に住む人間の心をとりえるのだろう。

たとえば、緑に包まれた農村の色。それは、なんと旅人の心を癒

してくれることだろうか。労働に従事しないもののノスタルジックな感傷と言われればそれまでだが、その次元の話題ではなく、緑が長い生き物としての人間の歴史を通して、人の心を癒す色となっていることを考えれば、国土に緑を保つ作業をなりわいとしてくれる人たちに、私たちは感謝しなければならぬと知らされる。緑が失われていく危機に対して、緑化を制度化してまでももうととする時代である。だが、農業とは、制度の下で「公害に強い樹木」などを植栽する都市計画とは違い、産業の性格そのものが人の眼になじみ心を癒す性格を持つのである。その意味を、農業に従事する人たちは、意外に気づいていないのではないだろうか。

美しいものは美しい、心なごむものはそれだけでいい、と素朴に感じていたのだが、技術文明、社会経済、制度が、それぞれ独自に複雑に発達してしまつたこの国の現在である。こんな現実には、田んぼを美しいと言つにしても、いささかの理屈をふりかけもどき

にかけた方が、その美しさの保全には効果があるかもしれない。さらに、その美しさの下で働く女性たちの立場に思いをやる時、もう

補助労働からの脱却と

家庭内における男女平等

さて、そんなに農業に思い入れがあるのならば、あなたは農家に嫁ぎ嫁になれば良かったではないか、と言われそうである。確かに、そんなことは考えたこともない私である。なにしろ、結婚というものに憧れを持った年齢、つまり私が大学を出たばかりの三十年前に私が農家に抱いていたイメージと言えば、キツイ、汚い、危険……いまでいう三Kに加えて、貧しさがあった。だが、若い女性にとつては、以上のことは決して決定的な問題ではないのである。愛する人と労苦をともにするのは、それはそれで幸せなのであって、農家のイメージでもっとも忌避したかったのは、戦前をいまだにひきずっているかのような家族関係の古さではなかったろうか。嫁はただ黙々と働いていればよい、しかも自由

ひとつ、農業が現代のありように極めて挑発的な産業であることを知らされるのである。

になる小づかいさえろくにもらえない。戦後民主主義から十年以上も経ち、世の中には労働基準法なるものも存在し、女子の深夜労働はいましめられ、生理休暇や産休の制度を具体的に職場で実現すべく労働組合がたたかおうとしていた時代、農家は近代化とは無縁の、まるで古代の化石のような世界に感じられたものだった。

農業基本法では

婦人は補助労働力

大学を卒業した後、ほんの数年間だが北海道庁に勤め広報誌の編集を仕事とした時期があった。一九六一年の卒業で、ちょうど農業基本法制定当時にあたっていた。ある時、農業政策を広報する必要があった、農業基本法の趣旨を私なりに咀嚼しようとしてみた。なに

につけ、近代化、大規模化が声高に叫ばれた法律の一端だが、「婦人の農業労働を近代的家族農業経営における補助労働力としての適正な地位に安定させ、家事労働を無理なく担当できるように」という理念が置かれていたのを印象的に覚えている。「無理のない家事労働」「近代的家族農業経営における補助労働力としての婦人の適正な地位」とは、その時代の農家の意識と比べれば、まさに改革を掲げた宣言だったと思う。

だが、私には違和感があった。いまならば声高に叫ばれて当然の、「男女の役割分業の見直し」がまったく射程に入っていないなかったためである。女性はあくまでも「補助」、そして「家事は女の天職」という設定に私は抵抗を感じてしまった。民主憲法はすでに基本的人権としての男女平等をうたっていた。職業選択の自由も基本的人権に掲げられていた。都市で職業を貫こうと心に決めた「新しい女」とつては、「補助労働からの脱却」は制度と意識の課題として、また「家庭内における男女平等」は新

しい民主的な法の体系の内実を埋める意識の作業として、たとえ実現には月日がかかるとしても、新しい制度であるならば、それを理念として掲げるのは、当然すぎる作業だったのである。

しかし、現実の厳しさを教えられたのもそのころだった。一九六一年から数年間、広報編集のために、全道各地を訪ねたのだが、いまま脳裏に焼きついて離れない光景は、筆舌に尽くしがたいほどの開拓地の貧しさである。しかし、自らが耕した農地への愛着は離れたいほどある。自らが切り開いた大地からもぎとられるように、涙を飲んで「離農」を決意する人たちの虚ろな表情は、道庁の新米の公務員として現地を訪ねた若い心をつちのめすのに十分な現実だった。農業における男女平等をうたうところではなく、私の仕事は施策としての「離農奨励」を筆にすることであった。「挙家離村」の津波が、やがて開拓地や農村を襲うことは容易に想像できた。

いま、北海道の農村の美しい光景を眼にする都度、開拓し尽くさ

れた大地の底に沈められた怨念の
ような光景が思い浮かぶ。国策の
結果、農村よりも先に豊かになっ
た都会の様子が、テレビを通して
農村に流れ込んだ時期だった。豊
かさを求めて、国民は雪崩をうっ
て消費者になった。女性たちはた
だ家族に尽くしていたのでは手に
できなかった労働報酬を、農業以
外の世界で働くことよって初め
て手にし、紙幣という紙切れによっ
て買う「自立」の味を知っていく
ことになる。都会と農村の生活の
格差を、農民たちが初めてまざま
ざと知らされた。それだけの力を
テレビは持っていた。都会は誘惑
に満ち、一方、農村は捨てられる
べき要素に満ちていた。農民たち
が悲惨な農地を捨てて町に出たの
は当然だったのだろう。

農村をリードする

女性の出現

三十年を経て、私は現代に生き
ながら仕事をする女である。その
まなざしで農業の地を訪ねながら、
こんどは、いま女性が働く意味を
問う絶好の場として農業があるの

では、と思いついている。

一昨年、道東の別海町農協婦人
部の集まりを訪ねる機会があった。
威圧的なほど「近代化」された農
業環境に眼を見張りながら、もっ
と眼を見張らされたのは、胸を張っ
て農業を語る

女たちの出現
だった。台所
と田んぼに這
いつくばるよ
うに一生涯を過
ごしたかつて
の農婦のイメー
ジとは遠く、
国際情勢から
農業経営、農
業技術まで、
堂々と語る女
たち。私が出
会えたのは、
農村地域のリー



別海町農協婦人部の集会

ダー格の人たちだったのたろうが、
そのようなリーダーが存在できる
という点自体に私は驚かされた。
北海道に限らない。全国各地に、
自分の仕事として選んで農業をす
る主体的な人たちがまた点のよう

な存在ではあるけれども、確かに
目に触れるようになってきている。
日本の農業は女性が支えている。
とはつきりと主張する。事実そう
であっても、主張しないことを美
徳としてきた世代とは大違いであ

る。そのこと
が、農村女性
の生き方を問
う集まりでは
当然の前提で
ある。そして、
産業を担って
いる以上、家
庭内の地位は
確立されなけ
ればならない
し、子育てや
高齢者の介護
などは社会保
障として当然
の権利として

主張する。このようなテーマのシ
ンポジウムなどに参加する時、壇
上よりも、会場発言の勢いのよさ
は、隔世の感である。

女性たちは、もはや、農村は父
祖伝来の美德にとみ、心豊かで子

育てにもっとも通じている、母性
の豊かに花開く地……などの美し
いことばにまやかされはしない。
美德めいた自慢話や、傷をなめあ
うしかなない愚痴や悪口が事態を解
決するはずもないことをすでに承
知している。

農業の保障と

農業者の老後保障を

女性たちは、家族農業が中心の
この国の農業を男性とともに担う
農業の協同経営者として、いかに
すればその立場が確立されるのか、
いつまでもその仕事に従事してい
られるための条件とはなにか。そ
して、いつかはやってくる働き続
けた後の老いの時間の保障のあり
ようまで、生活実態の上でも、制
度上でも確立できるための模索を
具体的に始めているように見える。
家族とともに農業を行う女性たち
の立場に立った具体的な提言や実
情報告を耳にしていると、私が若
い時代に感覚的に願っていたこと
……。たとえば基本的人権の下
で自由な意思を持って選択の結果
の結婚をし、職業を持ち継続し、

子を産み育てながら、家族が共に互いを支えあい、いのちの続く限りその職業が続けられるのにふさわしいような魅力を持って継続できるように願ひ、そして若い病み弱った時には、納税者の権利によって社会保障を受け、地域共同体の中で共同の思想による支え合いの中で生きていけるように……と

まるでユートピアに似た理念を掲げられる要素にみちた場としての農業が存在しているのに改めて驚かされる。かつて、その旧さに驚き、その場に近づくのさえためらうように感じられた農業の内側で、営々と女性たちの歩を固めてきた農婦たちの根強さに畏敬の念さえ抱く始末である。

自分たちが選んだ職業としての農業の未来をどのように保障していけるのか、という社会経済的な話題と、農業を生きた結果のそれぞれの老後をどのように保障できるか、というふたつの課題は決して別々のものではない。

アットランダムにテーマをあげるだけでも、女性の家庭内の地位の確立、日本農業の国際的な位置づけの確立、国内外における産業

としての安定、そのための農業技術の習得、経営技術の習得、そして高齢化社会に向けての社会保障のありようを問う試みなどが、どれも切り離しがたく結びつき、農業を生きる女性に複眼的な視野をせまる。

私が各地で眼を見張らされる女性とは、こんな複眼的な思考を身につけながら、まずは足元からの具体的な実践報告を行う人たちである。またまた兆しのような少数の人たちではあっても、こんな女性たちに各地で出会う時、専業主婦もキャリアウーマンも含めて、流通過程の末端として生きるしかなかった都市の女たちが身につける機会を奪われてしまった、思考の総合性、全体性の回復の兆しを、農村にこそ思わせられるのである。

しかし、その兆しをほんものにするには、女性たちをとりまく現実、なまはんかなかわりではどうにもならないほど、複雑なものになっているのも事実である。確かに、女性たちはかつての奴隷労働にも似た存在から脱却はしたが、それを支える大きな要素に、

近代技術があるとする、今度は、そのことが必ずしも女性の労働軽減や家族との団欒の時間の増加に結びつきはしない、というシレンマに気づかされることになる。近代化に翻弄されたとも言える、近代の不消化状態が、いま農村を覆ってはいないだろうか。

たとえば、大規模農家になればなるほど男女ともに労働時間が長い、というデータがある。いや、大規模農家の農繁期の午前十時に老人の自殺率がもっとも高まるというデータもある。人は、豊かさ求めて働くわけだが、形の「ゆとり」、たとえば農業経営の規模を拡大すればするほど借金もふくらみ、労働も増え、労働時間も男女にかかわりなく、規模の大きい農家の方が多い、というデータなどを眼にすると、改めて、人はなんのために働くのか、という問いを投げかけなければなるまい。

そして、どんな経営規模であっても、女性には、家事、育児、老人介護の負担は平等に訪れる。それが女性の役割と固定されている家族ではこの方がはるかに多い、むしろ「近代化」「経営権の獲得」

とはなんだったのか、という疑問に結びつく。

いま、農家の主婦たちは、これまでにない複雑な葛藤におかれていますように見える。建前としての「近代化」や「意識改革」という課題が農協婦人部や行政指導という形で降りてくる。農村の女性指導者たちは、ことはを蹴らせるようにその大切さを説く。しかし、現実に家族それぞれの意識を変えるなど、そうたやすいことではない。同じことは都会の働く女性の家族関係にも言える。スーパーウーマン症候群と言われる状態がある。これまで女性が引き受けていたなにもかもをこなしながら、仕事も一人前にする。いつか疲れ果て、家庭にも仕事にも「燃え尽き症候群」さながらの心身状態となる。確かに、時代を変えようとするには、意識改革の任を負う先駆者たちは、理想の旗を掲げて前線を切り開く異様なエネルギーを必要とするのは必然なのだが、これだけでは長続きはしない。先頭に立つものは疲れ果て燃え尽きるように倒れ、その他大勢はエリーリック・フロムという「自由からの逃走」

さながらに無責任な日和見に逃れ てしまったらう。

高齢化社会の到来と 女性農業経営者の位置づけ

では、どうしたらいいのか。
「事実は小説よりも奇なり」といつことばがある。二十世紀末、なんとさまざまな変化が私たちをとりまいてのことだろう。実態は理論よりも先行し、意識は時代の実態にひきまわられるように、しゃにむにの変化を迫られる。現在とはそんな時代である。しかし、現実には反射するだけでは、女性の歴史が進むべき正しい方向を見失ってしまう。私たちはよくよく事態を見据えながら、この激動の時代を前向きに受け止めて行く必要がある。

その意味で、高齢化社会の進行は、女性史に大きな変革をせまるテーマの筆頭にあげられはしないだろうか。

いうまでもないが、日本の高齢化のスピードは、世界一である。まもなく、四人にひとりが高齢者という未曾有の事態がやってくる。どう対処したらいいのか、いまや

国家的な政策テーマではあるのだが、一足先に高齢化社会を迎えた西欧諸国と比べてみる時、ことに女性のまなざしに照らせば、あまりにも姑息なのである。

基本的に、「高齢者のみとりは家族の手により在宅で行われるべき」という意識がこの国には根深くしみついていて、それは長い歴史を通してしみついた「意識」であって、現実には「意識」だけでは解決できない段階にすでに至っているのに、「現実」に対応できる「具体的」な方法を編み出す作業を、官民ともにサボタージュしてきた。その結果、発生したのが、「生活者」である高齢者を「患者」として病院に収容する「社会的入院」と呼ばれる現象である。当然、医療費は急増する。そして、医療費抑制という財政的な見地から、今度は高齢者を医療からしめ出すという政策が登場してくる。

高齢者の介護負担が

女性に

いま、保健医療福祉の流れは「施設」から「在宅」へ、と大きく変化した。もちろん、どのような政策も登場する時には美しい表現で彩られる。クオリティ・オブ・ライフの保障などが、そのコンセプトとなっはいるが、しかし、「在宅」への流れを受け止めるのは結局女性なのである。受けてのまなざしで冷静に考えると、農業者に限らず、女性の社会進出が必然の時代の「在宅」には、その政策を現場で具体的に支えるシステムが同時に用意されない限り、根づくはずがない。しかし、ことが弱者の幸福といのちの安全にかかわることだけに、待ったなしの対応をせまられる家族は結局、なんの援助システムもないままにおとしよりを抱え込む。そして、歴史上かつてないほどの、深刻な介護負担が女性にかかるという事態につながるのである。

異常事態とはいっけけれども、この国は現実には、福祉や医療にほ

とんど力を入れていない。それは、数字で簡単に証明できることで、先進国と比べた時、医療費の対GDP比も、また社会保障費の対GDP比も、明らかに最低レベルにある。最低レベルの医療が、さらに乏しい福祉を支え吸収した結果が「社会的入院」である。これまでの高齢者政策が財政面から破綻して、単純に「在宅」へ向けての流れがつけられている実情こそ、納税者であり、地域の構成員である私たち、また福祉の担い手とされてしまう女性たちが、未来に向けて、総合的な思考の枠組みをつくるための絶好の機会と私は思うのである。

まず、介護する側に立って考えてみよう。老後のみとりの担い手に、主婦を中心とした女性たちの家内労働が見込まれても、現実には農業労働に従事している女性たちが、家事や仕事に加えての長期にわたる老人介護をこなせるはずがないのである。その悲劇がさほど表面化しないところにむしろ日本女性の問題があり、「家」の内側で、鬱積した感情がからみあう陰

湿な悲劇は、まさに修羅場、生き地獄を生むばかりである。

事態は意識の変化に先行する、とあえて言い切ったのは、このような長いみとりは、これまでの儒教道徳の支配していた時代には想像もつかない新事実だからである。かつては、老人は寝ついたら死ぬのが常識だった。あすはわが身なのだから、おとしよりにやさしく、という感覚がそれなりにまっとうできた程度の老人介護と、現在のそれとはそもそも質が異なる。

「寝たきり老人」など存在しなかった長い歴史が生み出した日本人の心性を教育的にもぎとるのは容易なことではないのだが、事態は異様な悲劇に突入している、という面から眺めれば、その現実を直視するところから、私たちに巣くってきたモラルを一扫することもできそうである。

確かに、文化とは、穏やかに伝承されながら成熟していくのが理想だが、こと高齢化社会への方法論に関しては、古来の落ちついた知恵の伝承を絶つところからしか問題解決の鍵は生まれえないと思うに至っている。

このことは決して、老いて社会に役に立たなくなつたものを置き去りにして経済を繁栄させたり、浅薄な若者文化に迎合することではない。かつてない事態だからこそ、そしてこの現象が、要するに近代医学や近代技術を駆使した結果、公衆衛生の徹底や栄養学の徹底、工業化社会の成熟による経済成長を基盤に登場した「近代的」な現象であり、しかも福祉のテーマとしては特定の弱者が対象ではなく、だれもが遭遇する大衆的なテーマであればこそ、近代的に改革しなければ、問題解決はできないと思うのである。

ヨーロッパの対応

最近、ヨーロッパの農業国がどうやって急速に進行した高齢化に対処してきたのか。資料にあたっていたところ、「ドイツ人の老後」

(坂井洲二著、法政大学出版局)

という興味深い書物に出会った。同書には、ドイツの農業地域特有という「隠居契約」なるものが説明されていたのだが、「契約」ということばが登場する点は、いかにもヨーロッパなのだが、ここに

は「親を扶養する根拠」なる条文が記載されていた。扶養は親孝行の表現とあいまいに割り切つてしまつ日本人とひきかえ、契約を交わすことで何事も理論的に根拠を明確化しなければいけないドイツ人との差を知らされるものだったが、現在の日本の高齢化の実情は、いま触れたように、近代が生み出したたまものなのだから、欧米がいかにか近代を通過してきたのか、参考にする価値はあると思う。

まず、その地では、農家の親は隠居という形で子供に農場を譲るのが習慣である。隠居にあつては、農場を子供に譲渡する契約を交わす。その隠居契約書には、親の存命中には住宅、食糧、食事、病気になる場合の世話および看護、せんたくを行うことなど……などの細目が、実に細かく約束ごととして書かれているのである。

実は、もっとも驚かされたのは、「親の扶養の限度」についてのとりきめだった。「病氣もしくは看護を擁する状態が二週間以上経過し、そのため看護が困難になつたことを考慮するとき……」ということを書き出して、相続人や家族にかか

る負担が大きすぎるようになった場合には、「看護の義務は停止される」とある。それが「一週間とは、日本人の感覚では信じられないほど短い。扶養が家族の能力を超えた時、その後の保障は社会の役割となる。ホームや病院の費用は、保険、年金の体系と大きくかわる。そのような社会保障のシステムを作ってきた国と、現在の日本とは簡単に比較はできないものの、「近代」という時代を通過する間に、社会保障のシステムをも同時につくりあげてきた歴史を、いま改めて学ばなければならぬと思う。

日本では、嫁だけがなせうとか、息子が仕事をやめて扶養をすればいい、などの話題が斬新なものとして登場する現在である。それはそれで、嫁だけにまかされてきた習慣を崩すきつかけに、過渡的にはなるのかもしれないが、ほんとうは、家族にまかせては成り立たないほどの事態で、しかも時代の急務なのだ、と気づくべきなのだろう。

実は、私も関係した書物なので宣伝めいて恐縮なのだが、故・丸

岡秀子さんを中心につくられた農村女性問題研究会というグループが昨年出版した『むらを動かす女性たち』（家の光協会刊、一九九一年）という書がある。この中で、私自身は「農村の高齢者問題と女性」という一稿を担当しているのだが、同じ書に、農水省生活課長の大島綏子氏がヨーロッパ女性農業者の立場に関する最新資料の報告が行われていて、高齢化のテーマとも関連して非常に参考になったので、紹介させていたきたい。

女性農業者の法律的

地位確立

高齢化社会を乗り越えるにしても、EC諸国では、高齢化のための方策だけが単独に孤立してうち出されるのではなく、女性農業者の地位の確立のためには「心理的社会的障害を乗り越えなければならぬ」（「ヨーロッパの女性たち……農業における女性」、EC委員会刊行、一九八八年十月）との規定、それぞれの国の境界を超えて、「女性のための機会均等促進計画」として提言されたものの一貫として位置づけられているの

である。欧州閣僚会議が「家族経営農場で働く女性」について提言する内容は、「事業の創設もしくは設立と拡張における男女平等の処遇と、夫婦パートナースhip企業の設立を規定、配偶者が行った仕事に対する正当な評価、妊娠や子育て期間中の自営業女性の保護および代行サービスの設置を促進するとともに、加盟諸国が自営業者の団体に女性擁護のためのこれら施策の周知徹底をはかることを提言した指令を採択した」、など多岐にわたる。

その提言に基づいて、各国から実情が報告されているのだが、必要報告事項には、女性農業者の法律上の地位と並んで、社会保障、代行サービスの存在などがあげられているのが心に残る。どの項目もばらばらではなく、女性農業者が仕事を続けられるために総合的に意味を持つべき条件と考えられているのだらう。

女性農業者が仕事を続けられるようにとの配慮は、つまりは女性農業者を農業経営者として重要とみなすためである。日本でも、その点には依存はないはずだが、そ

れを具体的な制度の上で形に表すのかどうか。そこに、人を大切にすると、ということが心のありようや家庭内での思いやりなどにあいまいにほやかされてしまう日本との大きな違いがあると思われる。

女性の地位というと、男性たちは女権主義者などからかったりする。だが、ちょっと視点をずらしてみよう。「嫁ききん」というけれども、結婚も職業も法の下で自由意思で選択できることがうたわれている近代法治国家での「嫁ききん」は、女性たちからのその産業をめぐるすべての事情への「三くだり半」なのである。冒頭にも触れたように、農業が家族を中心に、天地自然の理に従順に行われる産業というのならば、その特性がより魅力的なものになるような制度的な工夫も必要だ。女性が夫の補助、あるいは黙々と働くだけの便利な存在と位置づけられているだけでは事態は変わらない。女性が農業経営に就く必要不可欠な仲間なのだという現実を認識して、まず、農業従事者としてしっかりと法律的に位置づけなければならぬ。そのうえで、女性が農

業を続けやすいような政策を有機的に国や地域につくらせなければならぬ。黙々と支えるだけ。そんな時代錯誤の常識の結果、嫁ききんがやってきたのであるから。

そして、縁をまもり、共同体のいのちを培う食糧をつくるという「特別」の職業への配慮もされなければならぬ。そのため気のないで済む人間たちはどのようにして報いたらいいのだろうか。自然空間の維持、景観の維持、だれもがそれぞれに役割を持ちあえる共同体としての存在……。こんなにも、多くの機能を有する農業社会は、政策的な意図を持って「保護」すべき対象なのではないだろうか。農村社会への政策的な投資の内容を、国も地域ももっと真剣に考えてもいいと思う。

それにしても、走り書きにひとしい稿ながら、書きながらしみじみ思うのは、現在、ここまで多面的に女性が、いや人間が働く意味を考えさせる職業があるだろうか、ということである。私たちは、二十一世紀を前に、そのことに気づかなければならぬ。

農村女性の果たす役割

北見農業試験場北見専技室

主任専門技術員 片山 寿美子

言う形で言及されています。

また、昨年策定された農山漁村の女性に関する中長期ビジョンでも、農山漁村の女性のあるべき姿として、女性の個としての確立とその実現方策が描き示され、農村女性の地位と役割向上の取り組みが積極的に考えられています。

このような時期、農村における生活の現状をふまえ期待される女性の役割について述べてみたいと思います。

し、女性の地位と役割の明確化と

はじめに

農村では

新しい風が必要
あつたかい心が必要
輝き続ける勇気が必要
頑張れる智恵と技が必要
あなた煌めいてますか
あなた輝けますか……

間もなく開ける二十一世紀に向けて、新しい農業や農村のめざす姿に加え、農村女性のめざす姿も描き示されている。

これは、農業での暮らし方やそこで働く人、とりわけ女性の想いや願いを抑え込み、単に機械を入れるとか、施設を整備するなど経営を築くための条件づくりばかりを優先させていたのでは、本当にスタミナのある農業や農村が築けない。農村の新しい時代を築くには、人と暮らしに焦点をあてた経営づくりが大切であるとの潮流の中で、農村女性の問題も活発に論議されてきました。

とりわけ、新しい農政の方向を示す新農政プランなどでは、女性の個（ひと）としての確立を重視

女性を取りまく農家生活の現状

農村では、農業の問題はあまた有つても、生活の問題はないと言いきる人がいます。

「金もある、物もある、今や時間もある、女性達だって結構言いたいこと言つて、やりたいことやっている」、これ以上何を望むのか欲を言えばキリがないと言つ意見が強く、これに同調する女性達も多い。しかし、自分の夢をもって何か始めようとするればその行く手

は容易でない状況に阻まれてしまうことが多い。

生活問題を調査した結果をもとに、農家生活における今日的な問題を考えて見たい。

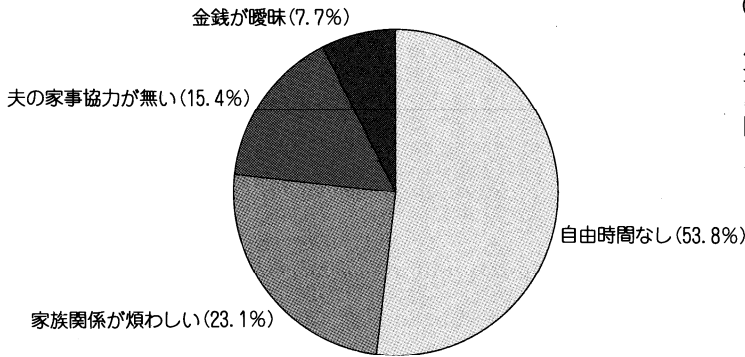
調査一

農家生活で考えなければならぬこと

湧別町はまなすの会調べ

図1

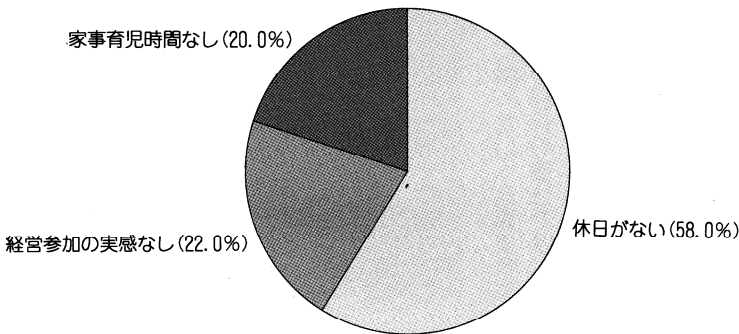
生活に対する不満



- 調査数五十人
平均年齢三十歳
平均結婚経過年数八年
- 1 いま何が問題か
- (1) 生活に関して
- 図1-1
- 曖昧な生活姿勢を問題視している
- (2) 仕事に関して

図2

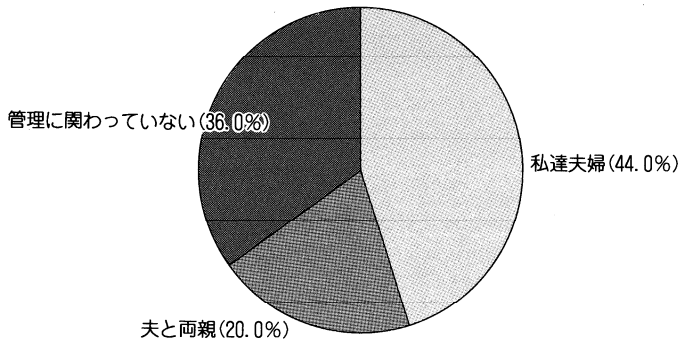
仕事に対する不満



- 図2-2
- 経営者意識が持てず、単に労働力として扱われることを問題視している
- (3) 経営や家計の責任者
- 図3-3
- 経営や家計管理に係われない現実を問題視している
- (4) 必要なお金の調達

図3

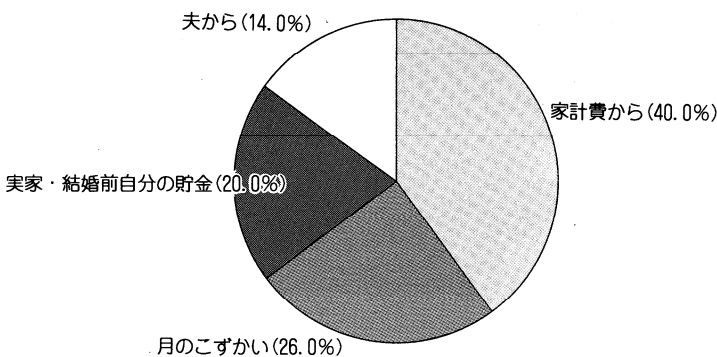
経営や家計の管理者



- 図4-4
- 自分の経済基盤が不安定である
- 2 これからの農家生活に必要なこと
- (1) 労働報酬として給料を支給する
- (2) 自立した生活を考える
- ・夫をいつまでも子供扱いに

図4

必要なお金の調達は



- 図4-4
- 自分の経済基盤が不安定である
- 2 これからの農家生活に必要なこと
- (1) 労働報酬として給料を支給する
- (2) 自立した生活を考える
- ・夫をいつまでも子供扱いにする
- (3) 時間の使い方を計画的にする
- ・同居世代の生活に必要な経費を曖昧にしない
- (4) 休日と休憩を区別する
- ・役割に権利と責任を持たせる
- ・納得出来る形で決める

調査 2

若妻がみた農家生活

十勝中部地区調べ

1、問題だと思ふこと

- (1) 家計に関して
 - ・専従者給与と生活費が曖昧
 - ・貯金はあつても実際には自由にならぬ
- (2) 食事に關して
 - ・食事を美味しいと言つて食べたことがない
 - ・野菜はたっぷり食べるので子どもの成長が心配になる
- (3) 住まい方に関して
 - ・親世代と同居だが生活のルールがない
 - ・プライベートが保てない
- (4) 経営参加に関して
 - ・労働力が主である(パートナーとしては認めていない)
- (5) 休暇や時間に関して
 - ・一人で外出しづらい
 - ・自分の時間が持ちにくい

これらの調査から、問題は無い

と言われる農家生活の中には、暮らし方だけにおさまらず農業そのものにも影響する問題が根深く残っており、次のような農家経営の体質が見えてくる。

- ・自分で決められないことが多い
- ・自分の行動に許可が必要
- ・お金も、暮らし方もどんぶり
- ・勘定と感情

家族だから当たり前、経営ルールと生活マナーを曖昧にして平和

表面的には、たいへん恵まれているが、その根幹の部分では、非常に脆く危ない要素を抱えて暮らしてが営まれていることが分かる。

まだまだ女性にとって、自由とは言えない状況で、本当に農業や農村が魅力的になれるのだろうか：
・農家の生活は大丈夫と言えるのだろうか、農村の女性達の公にはならない、ため息を耳にするにつれ、他人事と思えず心臓がドキドキしてくる。

現状を見据え、こんな暮らしイヤだ！ただ働きもイヤだ！自分で自分の生活を育てたい、私の人格を認めて！と主張する女性達の声

を無視せず、女性達の意識を形に変えることを支援して行くことが大切であると思つている。

このような、状況におかれてい

めざす姿と

求められている女性の役割

昨年、発表された農山漁村の女性に關する中長期ビジョンでは、農村女性のライフスタイルとあるべき姿として次のようなことが描かれていた。

- 1、性や年齢、家格などによる固定的な役割意識を解消し、個人が尊重され、本来の意味で人間的で温かみがある暮らしがたが確立されること。
- 2、自分の生き方を自由に選択し、その結果自信と充実感が持てること

これらを支える具体的な女性像としては、

- ・農業を職業として選択して誇りを持つている。
- ・経営や生活の場において能力を充分に発揮している

る女性の果たせる役割は何か、農村における女性の役割について考えてみたい。

地域の農業や村づくりの方針決定の場に参画している

- ・多様な役割に前向きにチャレンジしている(農業への係わり方も)。
- ・農業経営に経営者として自覚し、参画するパートナータイプ
- ・補助労働的なパートタイマータイプなど、農業に従事する女性が、ライフスタイルの状況に応じて、自分の係わり方を選択できるよつに、多様な選択肢を用意し意識を変える方向が示されている。

人生八十年代、女性が夫や「いえ」の従属者ではなく、自分の能力を活かし主体的に農業や地域と係わり、魅力の持てる農業や農村づくりの核になることが期待される

ている。

このように、農村女性のあり方をめぐり、働きやすく、暮らしやすい条件づくりの方法が身近なものとなるよう検討され提案されているが、これをどのように確かなものとし、実現させて行くかが大きな課題である。

これらを、どこか遠くで鳴る鐘

の音としないために、農村では生活担当普及員らが様々な方法で、農村の女性達から家庭や地域づくりの相談をつけ、女性のパワーアップと問題解決のための活動援助にあたっている。

活動事例から役割発揮の方法について考えてみたい。

事例にみる女性達の パワーアップ作戦

経営のパートナーになろう

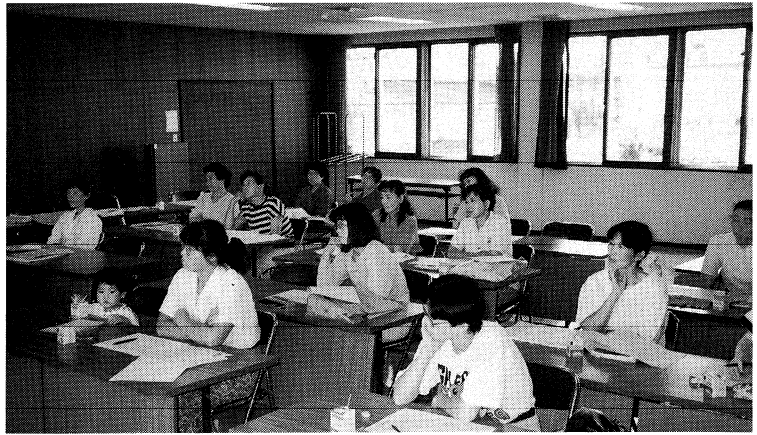
農業に、ただの働き手として参加するのは寂しすぎる。女だから経営のマネージメントが出来ないと言いつのなら、出来るように力を磨けば良い、そのための手始めとして農業経営簿記の記帳を身につけて経営管理に参画して行くこと、あちこちで簿記の記帳から経営管理の学習を始め、パートナーとしてわが家の農業おこしに係わっている。この様な女性達が経営に参画して行くと経営の体質は着実に

強くなって行く。



▲
経営管理のスピードアップを図るためパソコンを活用した簿記学習に取り組む（東紋西部区域の簿記講座）





生活の担い手として

夢をもとう

簿記を記帳し、わが家のマネージメントの力は充分身につにつき、夫からも認めて賞えるようになったけれど、夢の持てない暮らしが続いていると気づいたお母さんから、



▲生活設計講座に集い夢おこしの学習に取り組むお母さん達(東紋東部区域)

夢の持てる暮らしづくりを考えたい提案があった。

こんなお母さんの想いが広がり、簿記記帳の活動を、わが家の夢おこしと夢づくりへと発展させる事になった。

わが家の夢建設構想と称する生活設計樹立の学習である。この活動により、お母さん達は、夢を取り戻し、表情はとつても明るい。

農村の食文化から

地域おこしをしよう

農村ならではの食材に主婦感覚の付加価値をつけ、農村から都市消費者へ食文化情報を発信したり、旬の生産物を手ごろな価格で届けようと産直方式の青空市など消費者交流の場を設け、地域おこしの担い手としての取り組みも積極的



に行われている。

このほか、農村の景観つくりや、後継者育成等の担い手つくりの活動も積極的に行われている。

自分が選んだ道だから前向きに楽しく生きて行きたい。誰のためでもなく自分のために必要な役割を果たし、その力をつけて行きたいと、健気に頑張っている。

農産加工の技術を磨く女性達

(東紋東部区域)



おわり

これからの農村社会の中で女性

に求められる役割には、

- (一) 経営の担い手
- (二) 魅力ある生活づくりの担い手

- (三) 地域づくりの担い手
- (四) 後継者育成の担い手

等があり期待もさることながら、その責任も重くなってくる。これらについては、女性が一人と言うのではなく、男性と女性との平等なパートナーシップのもとにすすめて行こうと言ったのが前提です。隠れ星にされていた女性の立場を

反省し女性の力を認め、出番が広がりました。女性自身が頑張る時です。そんなこと出来ないよ…と尻こみしてしまつたのではなく、勇気を持って前に出ましよう。そのために必要な感性を磨くことが必要です。自分に出来る役割をしっかりと發揮して行きたいものです。



女だからと尻込みしては前に進めない駄目でもともと、とにかく前に出ることが大切と地域加工品の販売とPRにもかかわる (遠軽湯の里地区で)



青空市で消費者との交流を (遠軽湯の里地区で)

農村に新しい風を

——農家の嫁の立場から——

旭川市生活改善グループ連絡協議会

会長 西 島 八重子

農家に嫁いで二十年

私自身、農家の主婦になって二十年余りたちますが、これといつて行動を起こしていることもなく、平凡に年月を過ごして来た一人です。

この間の農業情勢はめまぐるしく移り変り、これに対して不満がなかった訳ではありません。昔の嫁さんは口答えする事なくただ黙々と仕事に従事するしかなかった。

でも現代の嫁さんは、実社会に出て給料を貰い、人前で発言する機会も多く経験しているので、これからの農村にも新しい風が吹き込んで来る事を期待したいと願っています。私自身ちようどこの中間に生きてきて子育ての最中、子供に振り回されている部分もあり、子供中心に行動している部分も幾多あります。農業を一生の職業と

選んで過ごしてきた二十二年を振り返って考えてみたいと思います。

私は隣の当麻町で農家の四男三女の末っ子として生まれました。三ヘクタール程の小さな水田農家、父は大工、母は二番目の兄と農業をしておりました。が少ない面積故貧乏しながら子供を育て教育してくれたのが大変、たつたよです。兄、姉達はそれぞれ道で結婚し、現在農業をしているのは私だけです。



今年の稲作の状況です。遠くに見えるのがわが家です。(平成5年9月20日)

昭和四十五年から減反政策に入り、実家の兄も「これでは生活していけない。」と両親を残し、家族を連れて東京に稼ぎに行きました。両親も六十の年を越え、水田を近所の人に貸して土地を管理しながら、現在八十過ぎの老体にムチ打ちながら二人で生活しております。私は農業高校を卒業しながら、農業とはほど遠いマイクを片手に持ち、お客様相手に道内、近郊を回って歩く職業でした。たまの休日は農業を手伝う事もありました。もともと農業は嫌いではなかったのですが、結婚するなら二人で一緒に働ける農業がいいなあ、大きい農家で姑さんがいてもいい、お酒に飲まれる人でなければ……等ちょっと甘い考えを話していたところ、昭和四十六年に、水田五ヘクタール、肥育牛十数頭、両親との三人暮らし、妹、弟はいるが、妹はすでに嫁いでいるし、弟は就職して家を出ている。田植機が入る等農作業はほとんど機械化された、他の模範となる農家だと言った。私にはちょっと立派すぎる程の家柄で勤まるかな？と思いつつも

結婚に対するあこがれと、興味半分でお見合いしたのが、今の主人です。私がこの家に嫁いできて良かったのが、悪かったのが、周囲には高校時代の先輩、同級生、後輩があり、心強く感じた反面、農業自体をあまり深く考えていなかったからこの職業に飛び込む事が出来たのかも知れません。

水田と畜産の複合経営で、牧草

育児、家事、

農作業に追われて

私が嫁いですぐある方が、息子さんも結婚した事だしといつて義父に「共済組合の監事を引き受けて欲しい。」と役持ちが始まり、以来義父は七十五歳の今日まで、いろいろな役をさせて頂き頑張っております。

私の結婚当時から、農家の忙しい日も関係なく、お役所相手の用事で出て行く父に、母はいつも「家にいる者がえらい目に会っている。」と口ぐせのように言っていました。嫁が来て後継者が出来

の収穫時期になると、空とにらめっこして昼食もそこそこ干草作りをしたものです。暑い日の仕事は長くつらかった。畦（あぜ）の草刈りも鎌を使った経験がなく、使い方は教えてくれたが、草と足の指を同時に切って病院に走り、その夏は仕事にならなかつたのも今となれば昔の話です。

人手が増えたから、これから父に役の一つでもということでしょうが、とんでもない話です！父は世間様には認められなかったから良いかもしれないが、私はまだ農業一年生、家族の頭数は増えても今までの家族三人に私を加えても四人にはならないのです。三人プラス一人で二人分になったり、三人分や五人分になる事だつてあると思うのです。今まで三人でスムーズに行っていた仕



稲の穂の下り具合が例年より淋しいです。堆肥の積んである一角でジャンボカボチャを3株うえ、3ヶなりました。何キ口あるか楽しみです。（平成5年9月21日）



農協婦人部のメ縄作り講習風景
(夏の間にはイグサを取って影干し
しております)

事も新米の私に仕事を教えるのに、仕事内容によっては違う事を教える先生役も、両親や主人にとつては大変だったと思います。まして仕事も覚え切らないうちに子供が出来、自分自身嫁いで年数も浅いのに育児、家事、農作業と思うように動けず、イライラした事もあります。同じ子供を持っている近所の奥様は、「自分の子供は自分

で育てます。」と言って子守しており、私が仕事をしている目の前を自転車で乗せて散歩して、実家へ帰ったら三日も四日も泊って来る。

私は一日泊って来るのが隣の山、近所の奥様がうらやましく思いました。でも小使いは月二万円下さしていました。農休日も各部落ごとで違いましたが一日と十五日に決まっております。中には人目につかないように仕事している姿もありましたが、小使いも農休日も減反政策が進むにつれ、野菜の複合経営が導入されて以前よりも忙しくなり、自然消滅していききました。

子供が小学校に入學すると経営は主人が譲り受け、小使いも家計費の中から使うように、と言われましたが遠慮でなかなか使う事が出来ませんでした。農休日といつても名ばかりで仕事に追われ、子供と自由している時間が少なく学校、保育所の行事のある時だけ、農作業を休んでいくくらいです。自由に使える小使いと農休日が欲しい……と当時は思いました。現在は四人の子供と両親、私達二人

の八人家族にまで増えましたが、農作業には二人手が揃わないと出来ない仕事の数があります。でも年と共に主人や私にも、学校や地域からの役が回って一家で三人も役が当たると、お互いちくはくに出掛ける事が多くなってきた、天候相手の農家の仕事故「これでは農業の経営が思うように出来ない、被害たね」といつて話した事があります。結婚当時母の口ぐせで「家に残っている者だけがえらい

簿記を覚えて経営を知る

目に会う。」という言葉が浮んできました。お互い何とか仕事の方はやりくりしながら出来ました、それと同時に子供達も成長し、中学、高校、専門学校と進み、お金も羽根がはえたようにどんどん消えていき、米価は下る反面、教育費は重むばかり、お金のやりくりはなかなか出来ず、組勸が赤になっっていくのも当然の事、少しでも黒になるよう努力しなければ……。

ちょうど普及所主催の農村婦人パワーアップ事業の一つとして、農業簿記の講習があり、私もそれに参加勉強してみました。少しでも簿記を覚えて経営の中味を知る事が出来、今までドンブリ勘定の多かったものが、数字にハッキリと出て、無駄なものが少しは解消されたように思われました。主婦も数字に強くなると家中が一つになり、私自身も認めてもらう事が出来嬉しかったです。認めてもら

えたというだけで次から次へと挑戦してみたくなり、一日の時間の活用も上手になって、心にゆとりが持てるようになりました。それ故私自身、若妻会、婦人部、趣味のサークル等に加わし多くの方々との交流の機会を得る事が出来、勉強させて戴きました。人との出会いがこれ程すばらしくもあり、又むずかしくもありと、井の中の蛙だった私も、それなりに成長出来、大変有難く思っています。若妻会

に加入していた時は、同年代で他の支部との交流を計ろうという事だ。で、本部組織を作る事が出来まし

婦人部会と農産加工で活躍

今は後継者も減り、運営が困難なので婦人部の中の若妻会（今はフレッシュミセスと呼ばれていま

す）で活動しております。現在東旭川農協婦人部の会員数は八百七十人程おります。又、旭川市には八

農協ありますが、農畜産物加工場が五つ程完成しており、それぞれの地域でフル活動しています。東旭川も平成二年十一月に完成し、東旭川農産加工研究開発グループと称する会員も四十人程おり、農家・非農家の方々が加入して交流を計り、現在進行中です。加工場も販売目的ではなく、自家生産物

を持ってい

き、それぞ

れの用途に

よって、び

ん詰、缶詰

粉末、真空

パック、麴

から味噌ま

で出来、旬

の季節にな

ると予約で

一杯です。

例えば、

ジュース類

（びん詰）

〓トマト、

シソ、黒豆

ぶどう等

缶詰〓かぼ

ちやのポターシユ、冬至かぼちゃ
小豆入り、黒豆煮、煮コンブ、ナ
シ

粉末〓山わさび、かぼちゃ、人参、
ヨモギ等

びん詰〓イチゴジャム、りんごジャ
ム、北五味子ジャム、ミニトマト
シロップ漬…

真空パック〓ごぼうの乾燥、パセ
リ、五目煮、ほうれん草…

婦人の方々の工夫とアイデアで
暇な時間を作って農繁期用にと調
理加工していく方もおられるよう
です。加工場には指導して下さる
方がついております。添加物なし
の自分達の真心こもった手作りの
製品が、時としてお世話になった
方へあげ、喜んで下さった言葉を
戴いた時はとても嬉しいものです。
又、地域の生産者と消費者を結ぶ
農協婦人部の朝市も毎回好評で、
自分の家で食べ切れない農産物の少
ない新鮮な野菜、果物、花等を持
ち寄り、朝九時から店舗前で開店
するんですが、二十分程で品切れ
する程、売る方も買う方も真剣で
大変な繁盛振りです。消費者との
交流も十年程になり、次回はどの



農産加工場の中、トマトジュースのびん詰作業中
左奥の大釜は一度にトマト150kg入ります。



加工グループの仲間と初めての展示即売会
トマトジュース、冬至カボチャ、シソ、黒豆ジュース等
(真中が西島さん)

ような品物が並ぶかを楽しみにしながら、どんどんふれあいの場が広がって行く様子がこの目でハッキリと伺えます。(朝市は七月下旬から九月上旬まで毎週土曜日)
現在私は主人と二人で水稲七ヘクタール、黒大豆四〇アール、緑肥用デントコーン四〇アール、二

農村婦人大学を受講

又、この四月から道内では初めての農村婦人大学が北大の太田原先生を学長に出来ました。旭川農業二世紀塾の女性二人が熱心にあらゆる方面に声を掛けられ、この春開校の運びとなり、四十四人の受講生で出発した大学です。期間は二九年で、今始まったばかりの学校に期待するものも多く、年間の予定表を見ますと立派な講師の方々の名前が並び、いろいろな分野で活躍されている先生方の話を聞き、お互い視野を広げ勉強させて頂きながら、月一回の受講を楽しむに農作業に精を出して頑張ろうと思えます。四十半とは言え、

ン二クー〇アール、自家野菜二〇アールを耕作しております。暇をみつけては近所の農家にパートに行く時もあります。その時の収入はわずかでも私に入るのですが、小使いになったり、家計費になったりで自由に使えるのでとても楽しみです。

家庭でも地域でも、皆様と共に協力し美しく年を重ねて過ごせるよう努力したいと望んでいます。昭和四十五年の減反政策の始まりと減反緩和の現在まで二十年余り、農業をやってきた経験の中より改革出来ればと思うものが少しあります。

一つ目は、旭川市で平成四年に若妻さんを対象に調査した資料があります。それにはまず第一に「結婚相手は人柄が第一、農家以外の出身若妻増える。」とありました。(資料はここでは省略)やはり農業についてはまだまだ未熟です。そこで基礎的訓練を受けら

れような研修や、情報交換等交流を受けられる場を作つて欲しいと

ていなければこれからの後継者はついていけないでしょう。



農協店舗前での朝市風景、旬の野菜の持ち寄りで、売買は盛況です。

思います。農業という職を選んだからには、周囲の理解や条件が整つ

二つ目は、労働に見合った報酬と農休日を取り入れて欲しいです

ね。いくら農業にも機械が入り案になったとは言え、機械を使っているのは夫、裏方のこまごまとした仕事は妻が多く、農作業の長時間労働、育児、家事と一人何役もこなさなければ一日が終らない。やはり農業は「つらい」と思っている人は五九%あります。一生懸命働いても自由に使える小使いがない、休みがない、定期的に忙しい事はあるが、仕事と休みのケジメをつけ、計画性のあるものになければ、これからの若いお嫁さん達も残らなくなるのではないのでしょうか？ 今の老人（老人）と言っても若々しい方が多い）は、年金を貰って温泉です、ゲートボールです、趣味の会です、と言ってお金と遊ぶ時間があふり、若い者にはうらやましい限りです。

三つ目は、男だから、女だからという役割分担をなくし、女性も経営者の一人であると認めて欲しいし、これからの農業は、農業人口の半数以上が女性の肩にかかってきていると思えます。もっともと計算に強くなり、組勘の見方、経営簿記の普及等勉強していった

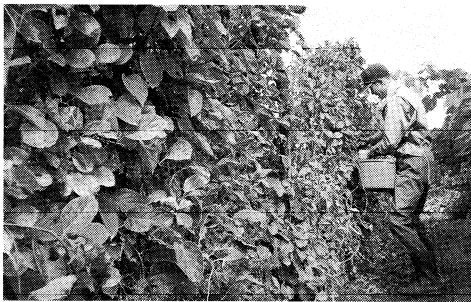
も良いのでないでしょうか。又、お互いの意見を述べ、能力を出し合いながら、女性の地位向上を計る場所もあつたつていいと思えます。

四つ目は、婦人グループ生産者と消費者のつながり作りが必要になつてくると思えます。朝市や加工場の利用で農家と消費者の交流を深め、農業以外の人々の理解を

真（新）の農業展開の道を

今年春からの異常気象で日本列島が痛めつけられています。長雨、台風、連発、地震とどうなっているのでしょうか？ 農作物も可愛くなくらいの姿をしています。四十年来の不作と言われている中で収穫を目前にして、今年の飯米、種粉（もみ）はあるのだろうか？と心配です。農業は自然相手の職業故どうにも出来ない腹立たしさがあります。これからの農業後継者となつて下さる若い方達のためにも、先輩の人達がすべての分野において良きアドバイザーとなり、

幅広く求めて行かなければ、これからの農業には厳しいものがあるのではないのでしょうか？、女性だから出来るというものを作り、見出して健康管理や温みのあるゆりの生活、二十一世紀に向けて、子供達の将来のある環境を目指して、婦人のパワーをフル回転出来るようなものにして欲しいと願っています。



畑の一部に北五味子（薬草）をうえています。父が栽培しており、収穫作業風景です。

これからの真（新）の農業を展開

して行ける道を作つてあげる役目を少しでも果せるよう努力したいものです。



油をとるためハウスの空地にひまわりを植えました。左に干しているのは北五味子（薬草）です。用水路には昔のままウグイが泳いでいます。

酪農を始めるに当たり、やりたい事が二つありました。一つは、家庭菜園を作り自給自足をする事。もう一つは、牛以外のたくさん動物達と暮らす事。やりたい事というより、乳牛・家庭菜園・牛以外の動物、この三つはワンセットで、三つが揃わないと酪農とはいえないという事に、いつの間にかなってしまうていたのです。

酪農に託した夢

乳牛と家庭菜園と動物達と農村生活

小さな菜園で新鮮な野菜

それで、早速小さな菜園を作りました。しかし一夏が過ぎると、当初の目標は、自給自足を目指すと変更されました。とても野菜までは手が回らない、という現実の一撃を受けた訳ですが、と同時に、決して切り捨てられない目標にもなりました。

畑を起して種を播き、雑草を抜く。ただそれだけで野菜ができると思っていた素人農民をも、大いなる自然は見捨てる事なく、汗し

猿 弘村

「公社営農場リース事業」
昭和五十九年入植者

円 丁 康 子

りました。

最近ではグルメブームで、評判の店には行列までできるようですが、農家にも行列する価値はあると思います。貯蔵、輸送を前提としないため、水々しく柔らかい、それゆえに傷みやすい野菜は、この畑に出来ないという事に入れる事ができないからです。

おそらく私は、最も一般的な都市生活者でしたが、幸運にもこんな野菜の姿を知るチャンスに恵まれました。チャンスに恵まれなかった人は、まだ知らずにいます。そんな人達が子供を生み、どんどん世代が繰り返されていったらどんな物が食卓に並ぶのか、考えただけで恐ろしくなります。

たのですから、スーパーでいう「新鮮」とは比べようがありません。土の上になっっている野菜を見て、初めて新鮮という言葉の意味を知

日本の農村文化にも 誇れるものはたくさんある

食べ物に無駄にしない農家の知恵にも又、感心させられます。漬物に代表される様々な貯蔵方法を心得ており、高価な文化機器に頼らず、自分の手に負える、いわゆ

る「手づくり」という方法で、毎年少しずつ工夫や手直しを加えながら積み重ねたものです。これがマイブランドとして代々受け継がれてゆくのですから、昨日やって来

た私になど、見るのとやるのとは大違いで、到底真似できるものではありません。これは一朝一夕ではできないプロの仕事です。季節の移ろい・気候・環境すべてを総動員し、巧みに無駄なく利用して食卓を潤す。ここまで来ると、農村文化を感じます。

農村婦人というと、ヨーロッパの女性が憧れを込めて理想のように言われますが、日本の農村にも誇れる物はたくさんあります。日本人の場合は、アピールの仕方が下手という事もありますが、まず何よりも、経済追求型の農業の中で疲れきっていて、アピールするエネルギーが残っておらず、受け

動物達の楽しさ

さて、もう一つの「牛以外のたくさんの動物達と暮す」というのも又、「仕事と遊びを共有する」に変わりました。趣味で飼うつもりでしたが、これが意外と役に立つのです。放し飼いの犬のお陰で、キツネ、イタチは悪さをしに来ません。猫のお陰で、ネズミの被害

取る側も、農業について考える必要性がないので関心も示さないのではないのでしょうか。両者が高い壁で隔っています。欧米人は自然の中で遊ぶ事が上手です。日本人のように、元あった自然を「整備」という名の元に壊し、水道・トイレ果ては温泉まで完備したキャンプ場で、大枚をはたいて買ったキャンプセットを持ち込んで、という人はいないでしょう。ただ林の中を、鳥の声を聞きながらのんびりと散歩する事に喜びを感じられる人が増えれば、必然的に農家にも目が向いてくるのではないのでしょうか。欧米人の自然観に、私は憧れています。

はなくなりました。住宅・牛舎まわりの草刈りは馬がしてくれま。人や馬が食べない草や傾斜地は羊が食べてくれます。自然の偉大な摂理です。互いに競合する事なく、共存できるようにうまく作られています。

たくさんのおまけもありました。



犬も馬も家族の一員、家の前で記念撮影。

冬は大ソリ・夏は馬に乗って遊び、羊は羊毛や肉を提供してくれます。そんな遊びも最近ではどこどこで、できるのでしょうか、ここでしか見る事のできない、写真にさえ写せない愛嬌者のいる風景があります。朝夕の牛舎の時間になると牛舎の前に座り、顔が見えると遠くから駆け寄って喜んでくれる犬。飼槽のトウモロコシは自分のものだと言わんばかりに、牛にワンと一声吠えて、牛と顔を突き合わせて食べている犬。犬と猫のキッス。サイレーシを運んでいる間じゅう、後をついて来る犬のような猫。牛の中で威張っているけれど、一人

農村こそ夫婦共働きの職場

夫婦のあり方にしても、文字どおり肩を並べ力を合わせて同じ仕事に励みます。余談になりますが、私はこれが本来の共働きという意味で、別々の職場で別々の仕事をするとするのは別働きと違って区別しています。共働きは同じ仕事をするので、共通の話題には事欠きません。知識や技術・力の足り

になると心細い馬。広い草地を人間の都合でひいた境界などおかまいなしに、尾を上げて疾走する脱走した馬。飼い主と飼われる者というより、家族という方がピンとくる、お互い様という愛情で結ばれました。

こんな豊かな心なごむ風景を親子で共有し一緒に仕事をする。仕事といっても、畑へはパンとジュース持参でピクニック気分。ついでに夕食分の山菜も取ったりして。牛追いは子供の手を引いてと、遊び心さえあれば、催しは盛沢山です。

ないところは補いあえるので安心です。お互いが気持ち良く仕事ができるよう、気をつかい、時間をやりくりしてコンビネーションを高め、二人合わせると三〜四人という労働能率を生み出す努力をします。「さすが、お父さん。」と父親の権威は高まり、「おやじ元気で、家に居て!!」となります。

親子・夫婦といった家族のつながり、人間らしいあり方というものを感じます。一日中一緒という事から、良い事も悪い事も派生するのでもこれ又事実で、決断していい事ばかりではないのですが、少なくともサラリーマン家庭では、あり得ない事だと思えます。

動物が大好きという実習生が、帰り際に牛の事ではなくて「家族というものを強く感じた。観光で通り過ぎるだけでは、もったいない。」と言ってくれました。今に

農業の本当の姿を

知ってもらいたい

農家は3Kだという悪い評判が先行していますが、最近は機械化が進み、随分と形態も変わってきていますし、世の中にももっともつと厳しい仕事か沢山あります。企業戦士となった御主人と時間帯のずれた生活を強いられ、会話も満足にできない奥さん。数字に追いつたてられ、上司と客との間で板ばさみになっているセールスマン。

一日中ネジ回しで、朝起きても自

して思えば北海道酪農に憧れて、生まれて初めて実習に入った時、牛よりもおじさんやおばさんのつやつやした頬と、大きな声で大きな口を開けて家族みんなが笑っている光景の方が、強く印象として残っています。おそらく、その時から酪農というより、酪農家の生活をしてみたくなったのだと思います。家族のコミュニティケーションの場として、家庭菜園、動物が三点セットとして加わったのでしよう。

分の力で手を開かれない工員。待っているものは過労死です。

最近、農家ステイという方法で農村に都会の人を招き入れようとしています。農家を理解してもらおうという第一段階としては、大変良い事だと思えます。ただ、見て触れるだけでは理解してもらえない事が沢山あり、一番伝えたい事が、その見て触れるだけでは伝わりにくい事であるという事。

誤解やトラブルを招かないように、正しくそれを伝えるにはどうしたら良いか。その方法を模索中です。

例えば、この先何年も取れるように大事に守り育てている山菜を、悪意ではなく、取り方を知らないだけかもしれないが、根こそぎ取ってしまったら、丹精込めた牧草地の中に車で進入し、畑を傷めていくというトラブルがよくあります。苦労したからこそ「もったいない」という言葉が出るのですが、それをケチだと誤解されがちです。確かに仕事は大変で活いけれど、雨の日や冬期間は休めるし、晴れた日に広い草地を大型トラクターで走り回る等、それを相殺する以上の喜びや楽しみもあるという事も知って欲しい。私達の生き

生きとした表情や、テキパキとしたプロの仕事ぶりも見せたい。農業の良いところも悪いところも含めた、偏見や誤解抜きの農業の本当の姿を、遠まきりにしている人達に知って欲しい。

たくさんの人に伝えるという事は、稼業を考えると無理がありですが、少しの人だけでも深く理解してもらえたら、その人達がまた友達に伝えていって…と、その輪が広がれば、今までの農業に対する見方も少しずつ変わってくるのではないかと思つのです。そうすれば、現在の経済追求のみに走っている農業の方向も、環境問題への取り組み方も違ってくるのではないかと。

知識や技術・情報を

交換できれば一石二鳥

とんでもない大きな話になってしまいました。話を現実に引き戻しますと、私の場合理解して欲しい人達とは、農業に関係する事(土・植物・動物)に関心があつ

たり、田舎ならではの楽しみ方を知っている人。バードウォッチング、カヌー、釣、天体観測、山菜取り、リース作り、草木染等々、まだ知らない遊び方もたくさんあ

るかもしれません。これらの遊びを楽しむためには、ちょっとした知識や技術がいります。住宅のすぐ傍まで鳥が飛んで来るので、名前が知りたくて野鳥の本を買いましたが、どれが何という鳥なのか、本と見比べてみてもよくわかりません。星がすばらしいからと、星座の本を買ってみました。どれ

都市と農村が共存できれば

— 共存 — 異質のものがそろって生存(存在) する事と辞書に書いてあります。私は、今この共存に凝っています。元々、牧畜とは人の食べれない物を動物に与えて、肉や乳を得るといふ共存の技術でした。都市部と農村部の共存。自然と人間の共存。

私は、生活の場として農村を選びましたが、芸術や音楽の頂点レベルの物を直に見れる都会も捨てない魅力があります。他の動物と人間の最も違う点が、芸術・文化を生み出した事なのですから。だから一二年に一度は、農閑期を見はからって、本当に見たい物を

がどの星だかさっぱりです。これは教えてもらった方が簡単です。趣味を通してできた友達、昔からの知り合いであるかのように話ができます。これらの趣味や、農家体験を媒体として、まず身近かな非農家の人と交流をし、お互いの持っている知識や技術や情報を交換できれば一石二鳥です。

見に行く事にしました。農村に住みながら都会の良さを、反対に都会に住みながら農村の良さを気楽に味わえるようになれば、今ある高い壁は崩れてくる事でしょう。混じりあうのではなく、共存が望みます。

都市と農村が物理的には無理だとしても、気持ちのうえで近くなり共存できれば、もっと暮らしやすくなるでしょう。そうすれば究極の目標である、自分の子供達が農業を、農業を選んだ私達の人生をも認めてくれる、そんな栄誉にあやかりたいと思えます。

農村と都市の 生活情報チャネルを開きましよう

～農村女性へのメッセージ～

コープさっぽろ生活文化研究所

所長 田端 弘子

まずお互いを知り合うことから

全国的な低温や台風などの影響で、野菜の代表格のキャベツの高騰が報道されました。発端は、特に不作だった九州地方の市場が行った広域集荷が、高値に吸引された集荷ソフトを発生させた結果、首都圏その他のキャベツが大幅に不足して例年の五～八倍もの高値に

なったということでした。主要野菜には産地指定の制度があるようですが、鹵止めにはならず、流通機構に踊らされる消費者と生産地の姿が印象に残りました。狭い国内の現象だからまた鎮静も早いでしょうが、これを国際市場で考えるところに大きな不安を感じました。

我が国の食料自給率がエネルギーベースで四六%とか、五〇%以上を輸入に頼っていることにならざるから、世界の下の宿人が扶養家族と同じだといふことではないでしょうか。しかも、もっと高い自給能力があるにも拘らずにです……。

「農業は国民生活の基



平成5年度産消青空交流会（農水省ガイドライン研修会・道央ブロック研修会）



穂別町の「減農薬・減化学肥料メロン」のハウス見学

盤」という潜在意識が強いのは、私が屯田兵の三代目に当たるせいでしょうか。戦後の骨身にみえる食糧難を知っているせいであるかもしれない。

現在、農業が直面している様々な困難や「貿易自由化」の大波は、農業を常に「国策の具」にしてきた避けられない「ツケ」だと思ふ気持ちが強いのです。「ツケ」を払わなければならないのは農業従事者の皆さんだけであってはならない筈です。ここ一番は国民の頑張りどころだ

と思います。しかし、「国民全体の責任」と言い切ると気持はスッキリしますが、かえって問題を他人事に置き換えてしまつので、まず自分の生活から農業を考えて見ることから始めたいと思つのです。それには、女性同士が農村生活者と都市生活者として、お互いを知り合うことがスタートだと思うの

協同組合の仲間として 柔軟なネットワークを

私が農村女性と同席する機会を得たのは、九二年ICA東京大会での「ICA女性大会」でした。全国農協婦人部の代表の方々の堂々とした発言や、交流パーティー

での明るい国際交流ふりに示された。パワーに接して、さすが現役女性の発散する力強さに圧倒されました。大会資料によると二百十六万人という大きな組織力をもつ婦人部であること。その活動も、農産加工品の生産、学習活動、健康や高齢者問題など多様な内容で流石だと思いました。しかし全国組

ですが……。でもその機会はほとんどありません。産地見学やその後の懇談会で話し合えるのは、男性ばかりなことが改めて残念な気持ちになります。

こんな気持を込めて、就農労働力の六割を支える農村女性に、私なりの「メッセージ」を送りたいと思います。

織レベルの発信や交流はもちろん大切ですが、総括的になりがちだと思いません。まず道内で、できれば身近な地域で「協同組合の仲間」として日常的な交流やネットワークを持ちたいものだと思います。共通の話題が沢山あると思うのです。

女性大会のテーマが「協同組合における女性の参画と地位向上」でしたので、印象に残ったのが、組合員における女性の比率でした。農業従事者の六〇%を占める女性が、組合員構成比では僅か十二%、



浜のおかあさんの料理教室



女性理事は〇・一％という現状報告には、理由があるのでしようが残念な気持がしました。生産者の協同組合である農協と消費者の組

て、逆に夫たち男性の参加が今後の課題になっています。都市生活では男性の家事分担はまだまだ少数派で、「夫は仕事、妻は家庭」

織である生協を比べてみると、男女の性別役割分担が見えてきます。生協では、組合員の九五％が女性であった

が一般的で、女性は家事と育児（介護）と仕事の三役を背負っているのですから、生協への男性の参加にはまだ時間がかかりそうです。しかし農村では、女性が基幹的農業従事者の半数を占めていることを考えると、農協にとって女性の組合員参加が重要だと思われる

ます。ICA女性大会でイギリス代表が報告の中で、「ロッチテール開拓者生協によって、女性達は自ら

出資して口座をもち、配当を受けることが出来るようになった。国政への選挙権を勝ち取るずっと以前に、生協の中で選挙権を与えられていた。その後、婦人ギルドによって組織化された女性として教育と訓練を受けることができた女性の社会的地位を向上させた」と協同組合が女性運動の大きな「揺りかご」であったと指摘し、「女性の影響力を発揮するには、

①物事に対する自分の姿勢を確かめる方法を学ばなくてはならない。②チャンスを見逃がさず責任を引受けること、またそんな女性を積極的に支援すること。③また男性社会だからと自分をごまかさぬ。④女性は忍耐の訓練が充分出来てからリーダーやパートナーとして最適である。⑤男性陣と衝突し合うだけでなく、協力し合えることを示すことが重要である。」と呼びかけました。協同組合の長

い歴史を持つイギリス代表の発言として心に残りました。

ICA女性大会を機に、「協同組合における女性の参画」について論議が活発になっています。この好機を生かして、協同組合の仲

農村と都市が近くなる関係

『面白いソ 高校農業科』の見出しで、道新(9/7)が農業科の入試倍率が年々増加していて、受験生の八割が都市サラリーマン家庭の生徒であると報道していました。この背景には、学校側が農業以外に食品加工や流通、緑地観光学、など幅広いカリキュラムを設定したことで卒業後の進路選択が広がったことや、中学時代に机の上での勉強に興味を持てなかった生徒たちが「高校で同じ三年間を送るより」と農業科を選択する例も多いとされています。「農業科に進学して生き生きと過ごし、人柄まで明るくなったケースも多い」という農業科教師の話や、「農業科に来て本当に良かった」「すっかり農業が好きになり、卒業後は

間として柔軟な女性のネットワーク組織を作りたいものです。特に、異業種間の交流が出来にくい女性にとって、視野を広げ頭を柔らかくするの役に立つと思いませんか。

農業系の大学を目指している」という生徒の言葉を読んで明るい気持ちになりました。農業後継者の進学が減っている点になりませんが、農業の魅力を知った青年が着実に増えることを期待したいと思います。

昨年、漁協婦人部の方々が講師になって魚食普及を目的にした「浜のおかあさん料理教室」が十回行なわれ、三百名以上が参加して好評でした。テキパキした段取りと説明に生協組合員から賞賛の声が送られました。毎回違った単協が講師役でしたので、十単協の漁協婦人部の方々と接することが出来たのも収穫でした。何より興味のあることですから、参加者も熱心で質問が多いことも良い関係

づくりの条件ではないでしょうか。ぜひ、農協婦人部の方々に講師にした「料理講習会」を実現させたものです。

産直活動の産地見学も十二農協に及び五百八十四名が参加しました。参加者がそれぞれ店舗の集まりで「自分の言葉」で報告するのが自然体で、意外と利用結果に結びつく場合が多いのです。「裸足で畑の土を踏ませてもらったのよ。ふわっと柔らかくて、少し掘ったらミミズがいてびっくりしたけど、有機栽培を目指して三年なんだって」「うっそお」「あら〜」「草取りを手作業でやってたわ。農薬の回数を減らしてるんですって」「大変なのねえ」という具合で言葉少なですが、実感が伝わって産地が近く感じる報告会になっているようです。

今年新たに、穂別町と画期的

な産直がスタートしました。穂別町が農産物表示ガイドラインに準拠したモデル事業に挑戦する「減農薬・減化学肥料メロン」の全量を引き受けるパートナーとして、コープさっぽろが穂別のメロン生産者に大きな応援を送る関係になったのです。この「減農薬・減化学肥料メロン」は、生協の店頭で他のメロンと一緒に並んでいます。小さなタグがついていて、それには責任の所在に「穂別町・コープさっぽろ」の連名が記入されています。こうした関係が他の作物にも広がってほしいと思います。

生協の役割は、意欲的な生産者との産直を拡大して、道内により多くの先進産地を広げるパートナー的存在にあると思います。この産直活動を生産者と消費者、農村と都市とを近づける絆になるように望んでいます。

農村と都市の生活情報 チャンネルを開きましょう

今日の情報化社会といわれる中

で、核家族化、高齢化、少子化な

表-1 小学校5年生の食事調べ (1992年)

日本生協連合会
全国くらしの研究委員会調査

■誰と一緒に食べたか

朝食	全員で		1人で	子供だけで	大人も一緒	無回答	
	全国	(札幌)	14.9%	23.6%	20.4%	40.2%	1.4%
			11.9%	26.9%	20.4%	38.7%	2.8%
夕食	全員で		1人で	子供だけで	大人も一緒	無回答	
	全国	(札幌)	41.3%	5.2%	6.7%	45.8%	1/0%
			41.7% <td>5.6% <td>14.8% <td>37.9% <td>0</td> </td></td></td>	5.6% <td>14.8% <td>37.9% <td>0</td> </td></td>	14.8% <td>37.9% <td>0</td> </td>	37.9% <td>0</td>	0

対象者数=1458(札幌108)

■食事は楽しかったか

朝食	楽しかった		つまらなかった	なにも感じない	無回答	
	全国	(札幌)	37.4%	10.7%	50.1%	1.4%
			26.8% <td>11.1% <td>59.3% <td>2.8% </td></td></td>	11.1% <td>59.3% <td>2.8% </td></td>	59.3% <td>2.8% </td>	2.8%
夕食	楽しかった		つまらなかった	なにも感じない	無回答	
	全国	(札幌)	64.3%	7.1%	27.3%	1.4%
			42.6% <td>10.2% <td>47.2% <td>0</td> </td></td>	10.2% <td>47.2% <td>0</td> </td>	47.2% <td>0</td>	0

対象者数=1458(札幌108)

■10年前の調査との比較

◆誰と食べたか

	< 朝食 >		< 夕食 >	
	全国82年	92年度	全国82年	92年度
家族全員で	22.4%	→ 14.9%	40.9%	→ 41.3%
1人で	17.8%	→ 23.1%	9.1%	→ 5.2%
子供だけで	20.1%	→ 20.4%	7.6%	→ 6.9%
大人もいた	38.2%	→ 40.2%	40.5%	→ 45.8%
無回答	—	1.4%		1.0%

対象者数=1458(札幌108)

◆コメント

①朝食について

前回調査に比して1人で食事をする子供が5%増えた。子供だけの食事が37.9%から43.5%へと5.6%増えた。

②夕食について

家族全員での食事は変化がないが大人が同席する比率が増した。特に、1人での食事が4%ほど減少した。

③食事に対する姿勢

慌ただしい中で摂る朝食については、夕食に比べて「楽しい」と感じる子供が37.4%と半数を割り、「つまらなかった」と感じた子が1割、「どちらとも感じない」子供が半数をこえている。実に無感動な朝食風景が浮き彫りにされた。特に、札幌の子供たちは、全国平均に比べて朝食で70%・夕食でも約60%が「どちらとも感じない」「つまらない」と回答している点が注目される。

ど社会の構造の変化や女性の生き方の変化が加速的になっていきます。それに伴って、家族のあり方や生活スタイルの多様化が進行していきます。食生活をみても、加工食品の増加、外食、偏食、個食(家族

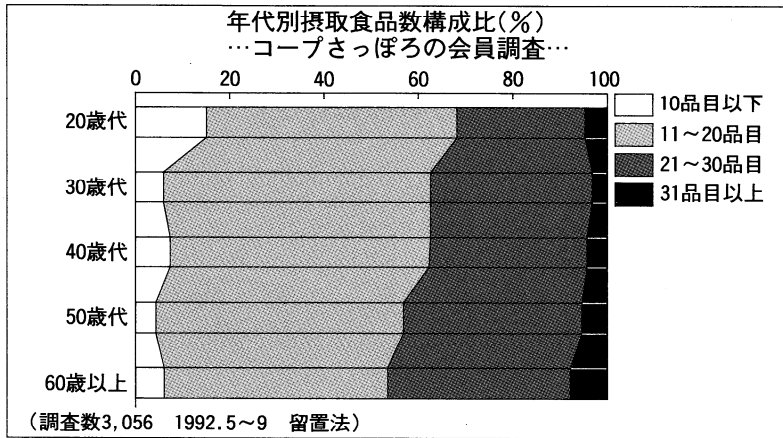
が同じ食卓で別々の食事を摂る)、孤食(一人で食べる)、などが進んで食事が家族の団欒の中心でなくなりつつあるようです。日本生協連合会の「全国くらしの研究会」が、九二年に行なった

アンケート調査「小学生(五年生)の生活と食事調査」をみると、生活の変化が子供たちの食生活に大きな影響を与えていることがわかります。この調査は、全国各地の小学校の協力を得て行ったもので、

調査対象は千四百五十八人(うち北海道が百八人)でした。このなかで「昨日一日の食事」について、「誰と食べたか」と「どんな食事だったか」を聞いています(表一)。注目されるのは、①朝食を一人で食べた子供が、全国平均で二三・六%。札幌では四人に一人が自分だけで食事をしていることです。十年前の調査から五%増えていることがわかりました。また「子供だけで食べた」二十%と合せて約半数の子供たちは親と一緒に食事をしていないことも気に掛かります。夕食は、さすがに家族の顔が増えますが、それでも「一人で」「子供だけで」が合わせて二割強です。②次に「どんな食事だったか」については、「楽しかった」が三割。「つまらなかった」と一割、「何にも感じなかった」という子供が六割を占めました。親と食事を共にしない、各自に好きなものを食べるという食生活の変化のなかで、料理方法や本物の味や旬を伝えることは難しくなっています。

母親たちの食生活はどうでしょう

図-1



うか。図-1は、コープさっぽろのコープモニターグループの『三色栄養バランスチェック調査』(九二年)による「年代別摂取品目数構成比」です。栄養バランスを保つには一日の摂取品目が三十

以上が望ましいのですが、各世代で二十品目以下が過半数を占め、特に二十代で十品目以下の比率が高くなっています。好みの食べ物に偏りやすい傾向を窺うことができる調査結果といえます。図-1

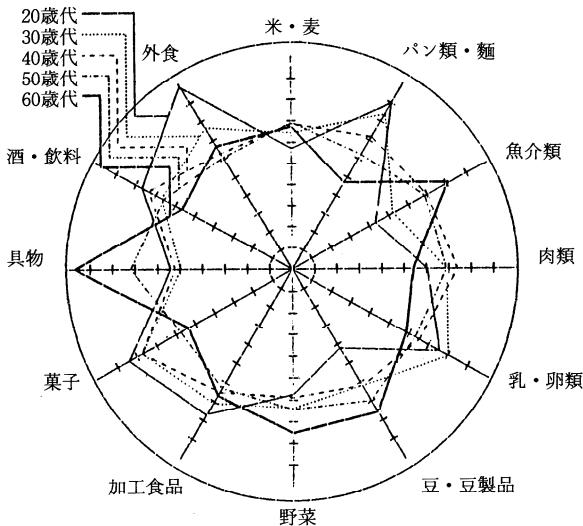
二は、コープさっぽろの家計モニター調査による「費目別支出割合の総平均を百とした指数」を表したものです。栄養モデルとの対比でないため正確には言えませんが、二十代と三十代では米食よりパン類が中心であり、副食費のバランスにやや欠けて加工食品と外食が突出していて、嗜好品の支出が高い傾向が示されています。

生活の変化の中で、食生活は多くの関心事の一つになって、相対的に位置付けが後退したといわれています。NHKの『国民生活時間調査』によると、家庭婦人の炊事にかかる時間は昭和四

五年から平成二年までの二十年間で二十八分短縮したそうです。女性の有職率が高くなったことが主な要因とが。しかし、誰もがバランスの良い食事がしたいと思っっているはずで、素材のうま味を生かしたもう一品が加わるような「食の情報」が、魅力的だと思えます。農村の女性は、農作業と家事とで労働時間の長いことが知られています。忙しい中で、農産物の

恵がきつと沢山あるに違いありません。農村と都市の生活情報を交換し合うことが、お互いの距離を近づけるスタートになると思えます。生産者と消費者の関係が、これまでの「売り手」と「買い手」の関係に止まるなら、農村女性の姿は見えにくいと思います。ぜひ、生活情報のチャネルを開いてお互いに活力のある二十一世紀の生活文化づくりに備えましょう。

図-2
食費の費目別支出割合の平均に対する年代別相対比較
(コープさっぽろ家計モニター、延べ950人の集計)



「若妻の翼」ヨーロッパへ飛ぶ

— 冷害の村から村おこしの村へ —



ドイツのフランクフルト市内にて、翼のメンバーとともに

福島県相馬郡飯館村在住（農業）

高橋 美佐子

今年の夏は、北海道南西沖地震、台風十一号・十三号による鹿児島豪雨の災害と、自然の力を大きさと怖さ、人間の脆さを見たような気がしました。

さらに私達農家は、雨や日照不足の異状低温の影響で、米の収穫が見込まれない状態です。私の住んでいる村は、周期的にヤマセに見舞われ、たびたび冷害凶作に泣いて来た村です。今年も昭和二十八年と昭和五十五年の大冷害を上回る冷害が確実となり、農家の経営は大きな打撃を受けるでしょう。収穫皆無になり、そのたびごとにニュースでテレビや新聞紙面を賑し、県内の代表的な「冷害の村」として知られて来ました。従って冷害に強い畜産に力を入れて来たのですが、これとて牛肉の自由化による価格の下落など、暗い影をおとしています。そんな暗いイメージをとり払うかのような明るい話題の多い村それが飯館村です。

「ミートバンク」「牛肉フェスティバル」「ほら吹き大会」などユニークな村おこしを進めており、近頃は「冷害の村」から「村おこ



スイス・ユングフラウヨッホ観光登山電車の中で



スイスの市営農場で農場の婦人とNHKディレクターとともに

この海外研修でほとんどの女性たちが、カルチャーショックを受けました。日本と同じ農家なのに家のまわりを花で飾り、日曜日には教会へ礼拝に行く時間がある。家事、農作業を夫婦で助け合って行い、農機具は自分で直す。代々受け継がれた家具を使う。物を大切にすること、時間を有効に使うこと……等々教えられることはかりでした。同じ農村女性である私たちはすっかり考えさせられました。

しの村」に变身しつつあります。その「ほら吹き大会」で、ある一人の主婦が「二十一世紀には、お母さんたちが海外研修に行く『村営主婦の翼』が実現しているはず」と提案しました。それがきっかけとなって平成元年に「若妻の翼」が実現したのです。

若妻の翼

—お嫁さんの海外研修—

村内に住む二十五歳から四十歳までの女性、つまりお嫁さん対象の海外研修です。平成元年から今年で五回目になります。私は二回

目の「若妻の翼」に参加しました。農家の主婦が秋の収穫の一番忙しい時期に、十二日間も家庭を空けることは大変な本人の勇気と、家

族の協力が必要だったのです。実際に私も大変でした。嫁は姑に従い、夫に従い、ひたすら仕事をすめる嫁が「良い嫁」という一般的な風習がまだ残っている所です。更に「なぜ息子も行かない海外に嫁が先に……」など言われる環境もある中で、そんなふうに分人たちの殻にとじこもっていた女性たちが、一気に飛び立ち自分の目で見、肌で感じて来たヨーロッパ研修の十二日間でした。

た。

まだドイツのフランクフルトでは、女性の駆け込み寺となっている「婦人の家」を訪問。そこでは、何らかの理由で家庭から逃げ出した女性や子供に安全を確保し、精神的、経済的自立への援助をする。女性の自立についてすっかり考えさせられる研修でもありました。女性は常に我慢をし、耐えて生活をしてきました。従って社会問題を自分の生活に関わりないという形で済ませ社会に目を向けずにきました。「婦人の家」の視察で今までいかに社会に目を向けてこなかったかを反省し、もっと社会問題に関心をもって視野を広める必要があるとつくづく感じました。男女が互いに、相互の人格を認め、尊重し助け合って、自立した男女共生の社会の姿に、感動さえおぼえた十二日間でした。翼に参加した女性たちは、自分自身の殻を破り自分たちの意見を堂々と言い、人の意見を素直に聞ける広い心を持つようになった。帰国後、彼女たちは、自分たちの力でいろいろな活動を始めました。

女性の声を響かせて

男女共生社会

の実現へ

ヨーロッパ旅行内容を、本に出

は女性の存在も大きくなってきています。今では、村の審議会や委員会にも必ず女性が半数含まれるようになりました。私の村は、女



ドイツの宿泊先にて、ビクトリア・エーダさんとともに

版したり、ビデオテープの制作をしたり、テレホンカードを作り村の特産品にしたりと。一人では出来ないが、多くの仲間で力を合わせ、実行し行動した女性のパワーは、男性以上かもしれない。村では男性中心の村政でしたが、最近

性の声を大に取り上げ、村政にも女性の声を「響かせ」ています。そして二十一世紀に向かって男女共生社会を作り上げるために男女のかかわり合いが非常に大切になると村は見たのです。村が二十一世紀に向って、男女共生社会を進

めようとしています。現実はまだまだ封建的、閉鎖的な農村ですから思うようにはいきません。しかし「若妻の翼」に参加した女性たちの中からは少しずつその変化が出てきています。

我が家は給料制になる

その一つは、家庭内のお嫁さんの立場への考え方と妻のあり方についてです。一昔前の男女差別の習慣が強く、女性は、男性より低く見られ、農家では、もくもくと働く嫁は「良い嫁」と言われ、給料や休暇もなく、経営参加の発言権もなく無償の労働供給者にすぎなかったが、まず家庭の中から変えなくてはと、夫や家族と話し合うようになり、月に二日の休日を設定したり。農家の女性は、農業と家庭を両立させ、キャリアウーマンであるのに農業労働の報酬がない。農家の女性は共同で働いているのだから正当に評価し、その実態に応じた労働報酬を払うことで家庭一人ひとりを尊重し、責任も果たすことが一人前の人間だ。家族だろうが他人であろうが農業労働

に報酬を払うことが「当然」となっていてこそ農業も職業のひとつと我が家では給料制を取り、炊事、洗濯に育児も互いに協力し合って、自分の出来ることは各自するまじに、

夫も子供たちも二年前から実行しています。

講演会やイベントには 夫婦で参加



スイスのルツェルン市内にて

農業という仕事は夫婦とも同じ仕事をしているので夫も家事を手伝うのは「当たり前」それが「自然」だと私たち夫婦は思っています。地域の因習やうわさ話にとらわれずに自分たちの家庭生活に合った生活スタイルを作っています。翼に参加したことで家族のつながりと親と子、夫と妻が互いに人間として尊重し合い話し合うことで、男と女のかかわり合いが少しずつ

老人・福祉問題にとり組む

変わってきました。自分の生き方は、誰が作るのでもなく自分自身であり、暮らし方は家族のつながりが大切だと気づき、共に講演会やイベントにも夫婦で参加することが多くなりました。そして一番変わったのは、私たち若妻自身です。各種のイベントや会合に、講演会などに夫婦そろって参加したりと外に目を向け視野が広がった。原稿の依頼もその一つです。

私の所属する女性だけのグループ（自主学習）で老人問題と福祉に関心があり、岩手県で老人福祉に取り組み実績のある所へ視察研修に出かけ、そこで私たちは肌で感じる物がありました。それは「個人個人が持っている生活課題、福祉課題を地域全体の課題に高め、今、何が出来るか。将来の方向は何か、等を考え、お互いの立場を尊重し理解し話し合いが必要」と事務局長の話。それは率直に話し合う世代交流会のことでした。自分たちの地域でも老人問題や福祉

について話し合いたいと考え、私たちは皆と一緒に考え、各グループの女性の仲間と一緒に「大自然と人間が調和する健康な村」と題して講演会を開催し、自分たちの手で、案内のチラシ、チケット、ポスター作りから講演の準備など全部作り、一回、二回、三回と毎回成功し、やる気があれば、何でも出来るんだと実感したと思います。

愛のボランティア活動

私たち二回目の「若妻の翼」団



自主学習グループ友和会、リース作りしている。

員は、帰国後グループ名を「愛、リーベ、90」と名づけ活動をしています。その一つは社会福祉へのボランティア活動があります。この活動は、老人の昼食の手伝いや話し相手になったりの仕事です。会員は「私たちが出来る事」からと、この活動から始めました。今では、身体障害者の介護も手伝っ



村の特産品として売り出し

てみたいと新しい意欲がわいてきています。また衣類のリサイクル活動もしていますが、それらの活動に対する会員の力の入れようは

ドライフラワー作りも 海外研修の成果

また主婦たちが中心となり、ドライフラワー作りも盛んです。これもヨーロッパ研修で民泊したご家庭でも手づくりのドライフラワーが飾ってあるのに刺激されたからです。ヨーロッパの主婦たち

大へんなものです。これも社会に目を向け視野が広がったからなのでしょう。

は、自宅の庭の花や周囲の野草を利用して、ドライフラワーをアレンジし、壁掛けを作り玄関や廊下にと掛けておりその技術は素晴らしいものでした。

私たちの住んでいるまわりにもドライフラワーが出来る環境があることに気付いたのです。自分の手で作ったドライフラワーを玄関などに飾ったら、今までと違った雰囲気で生活が出来さらにお客さんを暖かく迎えられる環境づくりにもなります。さらに親しい友だちにプレゼントしてみたいとの思いが、自分たちでドライフラワーの花づくりまで進みました。それらの花でつくられたドライフラワーは、イベントに出品したり、村の特産品として売り出しています。ちょっとした「ヨーロッパ研修」



イベントに出品した
ドライフラワー

というきっかけで、農村の嫁さんたちは「時間がない、金がない、自由がない」と言う習慣から一歩ぬけ出そうとしています。そしてこれからは自分で感じたことは相手に伝えていかなければならないのだと思うようになりました。